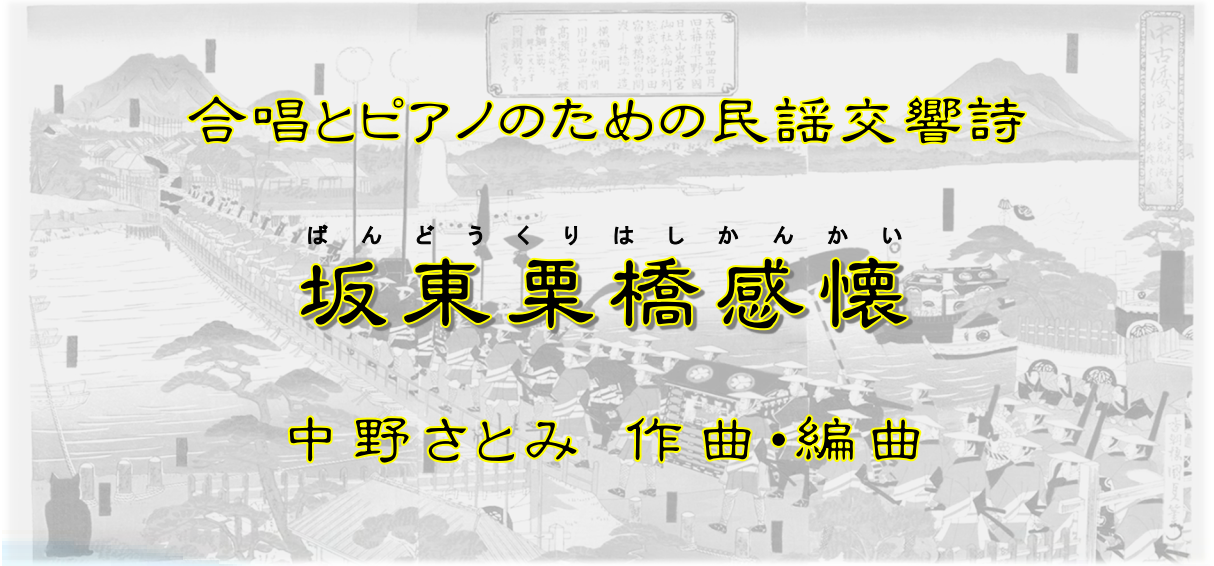


合唱とピアノのための民謡交響詩

坂東栗橋感懐（ばんどうくりはしかんかい）

中野さとみ　作曲・編曲

1

男声合唱団コール・グランツ創立 35 周年記念委嘱新作

加藤良一　男声合唱団コール・グランツ（2024年4月2日）

渡良瀬川と利根川の交わる流域・地域に栗橋というまちがある。ここは昔から水郷地帯で洪水もあったが農業にも恵まれている。関所のまちでもある一方で川を利用した水運もあった。この地に高橋郁という人がいて地元に因んだ多くの詩を作った、作品のいくつかは同時代の著名な音楽家下總皖一（しもおさかんいち）の作曲により音楽作品となった。

「坂東栗橋感懐※」はそれらの中から「栗橋草刈り唄」、「小舟（おぶね）を出せば」、「泊り舟」（高橋郁作詞・下總皖一作曲）ならびに「栗橋音頭」（高橋郁作詞・伝統栗橋民謡）の4曲を引用しメドレーの形で作曲・編曲を行い栗橋に因んだ合唱曲にしたものである。

田村邦光　男声合唱団コール・グランツ

※　感懐；ある事柄に接して心に抱く思い。

関所のまちとして栄えた栗橋

埼玉県久喜市の北辺、茨城県との県境に位置する「栗橋」は、江戸時代、日光街道の日本橋から数えて七番目の宿場にあたり、「埼玉六宿」（埼玉県内にある六つの宿場）のひとつとして栄えた町です。日光街道は、歴代徳川将軍の東照大権現への参拝、すなわち日光東照宮参詣のために創られたといわれており、栗橋宿はその中で、唯一関所を擁して栄えた宿場です。栗橋宿から先は利根川で街道は分断されていました。利根川には、軍事上の目的から敢えて橋が架けられず、それに代わり渡船場が置かれ房川渡（ぼうせんわたし）と呼ばれました。関所では「入鉄砲に出女」、武器が江戸へ運び込まれるのを防ぎ、江戸に人質として差し出された諸大名の妻子の国元への逃亡を取り締まるのが主な役割でした。

橋を架けない代わりに、徳川将軍家の日光社参のときだけは特別に臨時の「船橋」が架けられました。大型船50隻以上を横一列に連結、その上に竹や木材を敷き並べて橋としました。船橋の架橋に

は三年もの歳月を要したといわれるほどの大工事でしたが、社参が終わり、将軍が江戸に戻ると直ちに撤去されました。

参考:「日光街道 埼玉六宿」
https://rkato.sakura.ne.jp/essay/e130_nikko_kaido_saitama_rokujuku.pdf

このような古い歴史の町栗橋で活動している男声合唱団コール・グランツでは、創立35周年を記念して栗橋在住の作曲家中野さとみさんに委嘱したのが「合唱とピアノのための民謡交響詩 坂東栗橋感懐」という男声合唱曲です。

ピアノは歌と対等、伴奏にとどまらない

「坂東栗橋感懐」は、ピアノが「伴奏」にとどまらず合唱と対等な存在となっているところに特徴がある、300小節を超える交響詩です。4曲が切れ目なくつながっています。

1. 栗橋草刈り唄	ハ短調	高橋郁 詩・下總皖一 曲／編曲 中野さとみ
2. 小舟(おぶね)を出せば	変ニ長調	同 上
3. 泊り舟	ヘ長調	同 上
4. 栗橋音頭	ホ短調	高橋郁 詩・栗橋民謡／作曲・編曲 中野さとみ

曲は、爽やかな夜明けを告げるようなピアノの演奏による「栗橋草刈り唄」ではじまります。「♪朝は朝霧 おら草刈りだよ 歌ででかけりゃ 気が躍る ドッコイ サッサト 刈れ 刈れ ドッコイ サッサト 刈れ 刈れ」。

つづく「小舟を出せば」で歌われる「♪軒の下から 小舟を出せば 道も畑も 水の底 それは昔サヤレトンヤレナ」は、利根川の氾濫による水害を表現したもので、敷地内に土盛りをして作った水塚(みづか)と呼ばれる高台に倉などの建物を建てて食べ物や資産を保管し万一に備えていました。水塚の上の建物の軒下に小船がつねに吊るされていました。水害に備えた古人の知恵です。

「泊り舟」は、利根河畔に繋がれた舟や岸辺の風景を詠み込んだ歌です。帆を上げぬ泊り舟が波間にたゆたうのどかな気分に溢れています。

終曲「栗橋音頭」は、地元の盆踊りで盛んに歌われる調子のよい曲、地元の人であれば誰でも一度は踊ったことがある民謡です。学校の運動会などでも生徒が踊っています。

「栗橋音頭」は、隣りの茨城県古河市に昔から伝わる「古河甚句」と「八木節」をもとに1972年頃作られたといいます。「坂東栗橋感懐」では、「栗橋音頭」を“*Grandioso*”（壮大に）に、自由な変奏によって、合唱とピアノを自在に絡ませ、大胆に展開しながら、フィナーレに向けて歌い上げてゆきます。曲を締め括るのに相応しい雄大な雰囲気を備えたものとなっています。

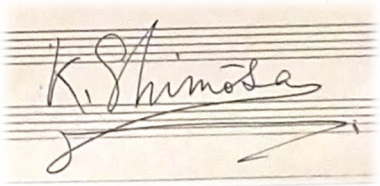
【中野さとみプロフィール】

千葉県出身。埼玉県久喜市南栗橋在住。東京音楽大学作曲科卒業。在学中に作曲を北爪道夫氏に師事。楽器は箏を滝田美智子氏に師事したほかピアノの研鑽を積む。

現在久喜市教育委員会主催放課後子ども教室（栗橋南小学校）実施委員長。地域教育にも注力。

【下總皖一（しもおさかんいち）略歴】

「下總」の読み方について：下總先生ご自身は「シモフサ」ではなく、「シモオサ」が正しいと述べたといわれており、実際に楽譜に書かれたサインは右に示すように K.Shimōsa となっています。ここではこれに従って「シモオサ」と表記します。



・明治31年3月31日、埼玉県北埼玉郡原道村砂原（はらみち すなはら）（現・加須市砂原）生まれ。地元の原道小学校を卒業後、父親が校長を勤める栗橋尋常高等学校に進学。家から2里近く離れた隣町栗橋まで徒歩で通学した。

・大正6年19歳、東京音楽学校（現・東京藝術大学）へ進学、卒業後音楽教師となり、本格的に作曲活動を開始、数多くの作品と実績を残した。「たなばたさま」「花火」「野菊」「ほたる」などの曲は、下總皖一の曲として有名だが、下總自身の作曲分野は極めて幅広く、合唱曲、器楽曲、協奏曲、校歌など、多岐にわたっている。また、日本の伝統音楽についても作曲し、その数は2千曲とも3千曲とも言われている。さらに、500曲近くの校歌を作曲している。

・昭和9年36歳、ドイツ留学から帰国、翌10年に著した理論書「和声学」は、ドイツでの恩師パウル・ヒンデミットから激賞された。その後次々と理論書を著し、「作曲法」「日本音階の話」「作曲法入門」

「楽典」「音楽理論」「対位法」など日本の近代音楽の基礎をつくったとされ、『和声学の神様』と言われている。

・昭和17年43歳、東京音楽学校教授に就任。門下生には、團伊玖磨、佐藤眞、芥川也寸志、松本民之助、山岸磨夫らがおり、男声合唱団コール・グランツの前指揮者・鎌田弘子先生は下總皖一最後の弟子といわれている。

・昭和31年58歳、東京藝術大学音楽部長就任。

・昭和37年7月8日、64歳で他界。

Back
坂東栗橋感懐TOPへ

Home
HOME PAGEへ